

デジタルサントリーホールを楽しむ(3)
—ライブ配信(3)—

1. 始めに

サントリーホールがライブ配信を行うとのアナウンスがありました。

<https://www.suntory.co.jp/news/article/sh0344.html>

前報(2)に引き続いてデジタルサントリーホール配信プログラムを視聴しました。

2. デジタルサントリーホール配信プログラム

サントリーホール チェンバーミュージック・ガーデンのキュッヒル・クアルテットによるハイドン・ツィクルス IIIを視聴しました。

日時：2021年6月26日(土) 19:00 開演 (18:30 開場)

会場：ブルーローズ (小ホール)

出演：弦楽四重奏：キュッヒル・クアルテット

ヴァイオリン：ライナー・キュッヒル

ヴァイオリン：ダニエル・フロシャウアー

ヴィオラ：ハインリヒ・コル

チェロ：シュテファン・ガルトマイヤー

曲目：ハイドン：弦楽四重奏曲

第38番 変ホ長調 Hob. III:38 「冗談」

第67番 ニ長調 Hob. III:63 「ひばり」

第82番 ヘ長調 Hob. III:82 「雲がゆくまで待とう」

受信はいつもの音楽用PCで、Sonica DACに入力します。



サイトのメンバー紹介を下記に引用します。

「3年ぶりに CMG に登場するキュッヒル・クアルテット。これまでに、ベートーヴェン・サイクル (2014) や、シューベルト (2016)、ブラームス (2018) の室内楽をまとめて取り上げ、ウィーンを拠点として長年活動が続けている歴史や伝統が随所に感じられる「記憶に残る演奏」で、室内楽ファンを唸らせてきました。

今回は「弦楽四重奏の父」ハイドンに着目します。多彩な技法を駆使して音楽的

に様々な実験を施し、4つの楽器のみでこれほどまでに多彩な作品を残した作曲家は他にいません。弦楽四重奏の大きな基礎をこうして築き上げたハイドンが残した約70曲の中から厳選してお届けする今回の9曲は、誰もがよく知るメロディーを持つ名作から逸品まで盛りだくさんのラインナップ。ハイドンが最後に残した第82番「雲がゆくまで待とう」は最高傑作との呼び声が高く、副題のついていない作品でも、楽しさ、軽妙さ、驚き、緊張、急変、奥行きなど様々な要素が音楽に明確に表れ、様々な変化に富んで飽きさせることはありません。

カルテットの新メンバーとしてシュテファン・ガルトマイヤー（チェロ）を正式に迎え、初めての日本公演となります。」

サイトのプログラム紹介を下記に引用します。

「プログラム・ノート

奥田佳道

ヨーゼフ・ハイドン (1732 ~ 1809) : 弦楽四重奏曲選

ウィーン古典派の「パパ」ハイドンならではの歯切れのいい語り口、緩急の対比も鮮やかな様式美は、ボヘミアのカール・モルツィン伯爵に仕え始めた1750年代後半に生まれ、ハンガリー系のパウル・アントン・エステルハージ侯ならびにその弟ニコラウス・ヨーゼフ・エステルハージ侯のもとで宮廷副楽長・楽長を務めた1760年代中葉以降に完成の域へと向かう。幼少期をハプスブルクの帝都ウィーンで過ごし、かのシュテファン大聖堂の聖歌隊メンバーでもあったハイドンだが、彼の言葉を借りれば「世の中から隔絶された環境に置かれたゆえ、私の音楽は独創的にならざるを得なかった」のである。当初ディヴェルティメントと呼ばれていたハイドンの弦楽四重奏曲は、偽作や編曲を除くと都合68曲を数える。パリやウィーンでは正規のルートによらない、いわゆる海賊版の楽譜が1760年代の半ばから出回っていたという。エステルハージ家のカペルマスター（楽長）としてウィーン近郊で創作に勤んでいたハイドンは、私たちが漠然と思い描く以上に早い段階からこのジャンルの匠だった。1770年代以降、作品9、17、20、33など「6曲セット」での出版が開始される。この「6曲セット」という古典の流儀は、モーツァルトのハイドン・セット、ベートーヴェン最初の弦楽四重奏曲作品18にも受け継がれる。

第三夜は愛称をもつ3曲。まず、フェルマータやゲネラルパウゼ（全休止）を駆使した第4楽章のエンディングから「冗談」と呼ばれる第38番 変ホ長調 Hob. III:38。ハイドンはこのプレストの終楽章にアダージョも添えた。遊び心満点だ。1781年に書かれ、ロシア大公パーヴェル1世に献呈と記された作品33 全6曲。いわゆる「ロシア四重奏曲」のひとつ。モーツァルトに感銘を与えた曲集である。ここで第67番ニ長調 Hob. III:63「ひばり」。愛称の名づけ親は誰だろうか。前述のトーストゆかり、とされる名曲で作曲は1790年。イ長調の第2楽章アダージョ・カンタービレ、それに短調の調べをさりげなく織り込んだ後半楽章も胸をうつ。最後は熟達のソナタ楽章（第1、第4楽章）はもちろん、スケルツォと記したいメヌエット楽章、装飾音も

鮮やかな変奏楽章が聴き手を捉えて離さない第 82 番へ長調 Hob. III:82「雲がゆくまで待とう」。完成作としては最後の弦楽四重奏曲である。愛称は第 1 楽章の主題が同名のイギリス民謡に似ていることに由来する。曲は 1799 年、若き日のベートーヴェンにも手を差し伸べていたロプコヴィッツ侯爵の依頼で書かれた。ハイドンこのとき 67 歳。28 歳のベートーヴェンも奇しくもへ長調の弦楽四重奏曲（作品 18-1）を書いていた。」

3. デジタルサントリーホール視聴の経過

前回同様、事前にメールで受信手順が知らされてきましたので、それに従って受信を開始します。配信は YouTube ではなく、オリジナルの動画配信プラットフォーム「SmartSTREAM」を使用した配信とのこと。

指定された受信手順ですぐにサイトに入れ、Sonica DAC の表示は 48KHz となっています。

曲の解説は、上記のプログラム・ノートが参考になります。

第 38 番 変ホ長調「冗談」は、副題のとおり軽妙な表情の曲で、最後に終わると見せかけたりして終わってなかったりとユーモアのある演奏です。

第 67 番 ニ長調「ひばり」は、お馴染みの聴く機会の多い曲です。ウィーン流のハイドンはかくあるべきというような演奏で、各パートが弾くというよりは歌うといった演奏です。

第 82 番 へ長調「雲がゆくまで待とう」は、あまり聴く機会がありませんが、ウィーンフィルのコンサートマスターだったキュッヒル始めベテランばかりの円熟した演奏です。

アンコールは、ハイドンばかり 5 回もあって、まさにハイドン三昧の演奏でした。

ウィーンフィルのメンバーによる室内楽の演奏でしばしば見られる演奏スタイルで、チェロ以外は立って演奏し、ヴァイオリンとヴィオラ収録用のマイクは頭上にセットされ、チェロ用のマイクは下方からチェロの胴を狙うような配置です。このためか、各楽器の音は明瞭、かつ雰囲気がよく捉えられています。そして、音質は並みの YouTube を超えたリアルなものです。

さらに後日のアーカイブ配信も同様に視聴できました。

4. まとめ

デジタルサントリーホールのライブ配信とアーカイブ配信が視聴可能となりました。

以上

